

身延の自然

三 木 淨 達

身延の自然！ 何といふ懐しい言葉だらう。宗祖の御人格其儘に嚴然として聳わてゐる身延の山、吹く風、流るゝ水の音までも皆妙法の調がある。これが身延の自然なのだ。

私は何と云つても、此の身延の自然に心を引かれずにはゐられない。宗祖御入山以來、六百五十五年といふ永い月日は流れた。「日蓮が弟子檀那等は此の山を本として詣るべし」との御遺言に依つて、毎年參詣人は増してゆく、そしてその參詣人の顔は毎日／＼變る。だがたゞ今も昔も依然として變らないものは身延の自然があるのみだ。

今私の眼に映る身延の山や木や草や石、又現在私の耳に訪れて來る風の音や水の流れ、これが其儘に六百五十五年昔の身延の自然なのだ。朝な夕な宗祖の御眼に觸れ、お耳に入り、お心に通ひ奉つた身延の自然よ。

たちわたる身のうき雲もはれぬべし

たへぬ御法のわしのやまかせ

おゝ此の御歌こそ、本師釋尊から日蓮上人の御人格を通じて私等に及ぶ、血と肉とのさゝやきを調べたまひしものである。されば宗祖の御魂も亦永遠に流れて、絶えぬ身延の自然の中に、未來際迄も住み給ひて私等の參詣を待ち給ふのである。

今に即して昔が見ゆる！ 斯う考へて來た時、私は身延の自然に對して、云ひしれぬなつかしさを感ずるのである。

今に即して昔が見ゆるならば、私等の心を通じて宗祖の御心に觸れる事が出来るのは當然である。そしてそれは夢でもなければ、決して空想でもない。私等の様な凡夫が……と、云ふのは人間として尤もな謙遜である。が然しそこが信仰の尊い所で、眞に宗祖の信仰に異体同心するならば、どんな凡夫でもやがて宗祖の御心に如同し、本師釋尊と相通することが出来るのである。宗祖も「此法門は二千餘年の當初日蓮慥に釋尊より口決相傳せしなり」と仰せになつてゐるではないか。

概に凡夫の私等が其儘で、宗祖の御心に觸れる事が出来るこの確信を得たならば、あの忍難弘通の鎌倉の巷を去つて、この草深い身延の山に入らせ給ふた御心が判るだらうと思ふ。それは世間で所謂老の身を養ふ隱居生活とは全々意味を異にしてゐるのである。寧ろ身延九ヶ年の御生活こそ「法華經を我得し事は薪こり菜つみ水くみ任へてぞ得し」の御生活であつたのである。

されば人が訪れて來れば法談に時を遷し給ひ、暇さへあれば筆に親しみ給ひて、後の世の私等にも

平等に法華經の光を傳へてやらうとの、有難い御慈悲からの御入山である。故に一度この尊い宗祖の御魂を擁して永久に流れる身延の自然と、永遠に絶わぬ法の山風に接した時、私等の心の荒びは、忽ちに消滅するのである。

あゝ、驚くべき靈格の身延の自然よ！

身延の自然こそは、永久に懐しき私等の信仰の中心である。

聖祖御入山を懐ふ

石 井 緑 線

仰げば尊し鷺の山

常に住むてふ峰の月

本地の風光とこしに

實相真如の法の華

天地に咲きて香ばしく

げに寂光の浄土なれ。

宗祖日蓮大菩薩

建長五年の春の日の